

# 言語生活

野元菊雄

ここでは「言語生活」についての、わたしの見た主な傾向について述べ、主として単行本についてあげることにします。いろいろな雑誌論文について網羅的に列挙するのを避けたのは、なるべく重点的にという編集部の注文によります。

わたしの認識によりますと、この「展望」の題目でソシニール学でいうところのパロールを主なものとしているのはこの「言語生活」の項が第一です。他はどっちかというところの面に傾いているように思います。

ソシニールは、学としての優位をラングの学に置いていませんし、それも理由のないことはありませんが、これで安心してしまっているのは言語なるものは半分しかわかったことにはならないのではないか、と思います。

幸いに、最近はこの点についての反省が世界中に広がってきたようです。その一つの理由は、従来の帰納的分析を一八〇度転換して演繹的方法をとることにより、一挙に言語の本質に迫るかの気負いの見られた生成文法も、所詮はラングの学を出ず、結局は問題解決の決め手とはならないことを悟ったことにあります。最近のアメリカ

カでの社会言語学の隆盛は、パロール軽視への反省から出発しているように思います。新しい言語学であるかどうかは、この認識があるかどうかで決まると言ってもよろしいでしょう。

言うまでもないことですが、以上のことは、どちらか一方だけいいと決まらずに言っています。わたしがここでパロールの学を重視すべきことを言うのは、今までの軽視への反動として言っているのです。バランスをとった、いい子風に言いますと、車の両輪の如くでなければいけない、と言っているのです。雑誌で言うところ、ラング主体の「言語」と、パロールに眼を配る「言語生活」とが共存しているのは、非常に健康的であります。

ついでに言えば、これはここでカバーする兩年の範囲ではありませんが、昭和57年2月に出た林大氏監修『図説日本語』（角川書店）の各項で出典としてあがっているものうち雑誌では「言語生活」が29項目に及んでいるのに「言語」からは1項目に過ぎない、というのも象徴的なことでありました。

さて、わたしの担当のこの兩年は、大きなものとして、昭和55年3月刊の宇野義方氏『言語生活研究』（明治書院）から出発したと

いってよからうかと思ます。この大著につづいて同じ著者の『言語技術研究』(同上)も5月に出ました。

前者は「コミュニケーションの基本問題」という副題がついており、後者の副題は「コミュニケーションの実際問題」となっています。ともにコミュニケーションが主題であり、これは「言語生活」の重要な項目であります。

これらは既発表の論文を集めたものであり、このような本作りについては、わたしは、本誌118に林四郎氏著『言語行動の諸相』の書評を書いたときに述べたように反対で、この宇野氏の著書についても同じような感想を持っていますが、これは著書の内容とは直接の関係はありません。

宇野氏の二著については、やはり同誌120に、土屋信一氏による紹介が出ています。言語生活研究には古く時枝誠記氏の『言語過程説』によるものがあり、宇野氏はこの師の流れを受けてついでいるけれども、もちろんそれ以後の事象を具体的に取り上げて論ずる方向をも取っておられますので、この点で、いわゆる社会言語学とどのようにかかわるかが問題である、というのが土屋氏の論でした。土屋氏によれば、それは見きわめにいい、とのことでしたが、わたしもまたそう思います。

わたし自身は言語生活研究、これはまた社会言語学的研究ですが、とにかくパロールの研究というものを主体とすべきだと考えていますが、林氏の『言語行動の諸相』にしても、この宇野氏の二著にしても、ラング研究の影をどこかに引きずっているような気がします。昔の国語学で優秀な成績を収めた方々には、この辺はなかなか吹き切れないのでしょうか。

この点からいうと、『言語生活研究』の方では、ここで扱う問題に一番近いのは3の「言語生活と行動」という編に収められた論文であり、『言語技術研究』の方も3の「言語生活研究の展望」の項でしょう。わたしは先に述べたように、「言語生活」を非常に狭く考えていますが、本誌のこと展望欄執筆の点からも先輩である(昭和33年、昭和45、46年を担当された)宇野氏はずっと広く考えておられるようです。

次にあげたいのは、やや異例ながら、国立国語研究所の『大都市の言語生活』(三省堂)です。これは、分析編と資料編とに分かれていて、ともに昭和56年3月発行です。

企画者の考えによれば、これは永く待たれながら着手されていないかった、大都市での言語の実態調査の第一号の結果の報告書です。この調査を含めて、今までの言語の社会調査は調査の場からいうといわゆるゲメインシャフトにおけるものでありました。しかし、社会にはもう一つの面、ゲゼルシャフトというものがあって、しかも、そのウエイトは社会が進展するにつれてますます大きくなるように思われます。したがって、その面の研究は社会言語学にとっては大欠かすことのできないものです。

以上の二つの面についての調査が国立国語研究所で企画実施されたのは、社会言語学の高揚期と重なっていることは偶然ではありません。ゲゼルシャフトの調査は『企業の中の敬語』(三省堂)という報告書となって世に出ますが、これはわたしのこの「展望」のカバーする年以後のことになります。したがって、ここでは多くは触れませんが、ただここでゲメインシャフト、ゲゼルシャフトという

社会学的用語を使って論じたところのものは、社会学とは全く違う社会言語学的な意味で使っているのであって、社会学的な見地からの批判は全くの外れだということを述べておきます。

国立国語研究所におけるこの両調査の企画者としてわたしは、このような言語生活についての調査に関する基本的な考え方を『大都市の言語生活』の中の「調査の目的と意義」の章で述べておきました。

趣旨は、ソシニール学を用語を使えば、社会言語学はパロールの言語学であり、それはラングの言語学に劣らない価値がある、というよりもむしろ、ラングとパロールとのどちらに実体があるかという点、ラングの存在が実にあやふやであるのに対して、パロールの方が確実に実在したものであって、拠るべきものであること、ことばの個人差の分析から社会言語学は出発すべきこと、などなどです。これをわたしは「社会言語学的調査の基礎になる理念」について述べたものと自ら規定したのでした。「理論」といわずに、あえて「理念」としたのは、まだ「理論」にまで昇華してはいないで、基本的な考え方について考察しているにとどまると考えたからです。

これは、日本には社会言語学的調査の結果の積み重ねはアメリカなんかよりはずっと早くあるにも拘らず、理論構築の面で遅れているのを深く遺憾としていたわたし（たとえば、野林正路氏との共同監修による『日本語と文化・社会』全五巻（三省堂、昭52）の第一巻『ことばと心理』の巻頭に誓った野元菊雄・野林正路氏「序章 人間所在の言語学へ——その意味と目指すもの——」）が、及ばずながらそ

の構築の第一歩として手がけたものです。幸いにこれについては、本誌106の「新刊紹介」欄をはじめ、この小文の意義について二、三の紹介的コメントがありました。しかし、まだ本格的な批判はないようです。わたしとしては相当率直に生成文法の言語研究における無力さを指摘したつもりですが、この点についての反論がないのは、物足りない思いがしています。これも担当の範囲外ですが、本誌108に載った宇野義方氏の書評でも、この部分に対しての基本的反対はなかったと思われます。

以上「やや異例ながら」と先に書いたのは「展望」欄の筆者の自分で自分の論をこのように紙幅をとって紹介することになるからでありました。

もう一つついでにいえば、国立国語研究所の日本語教育センターを中心としたグループは、文部省科学研究費特定研究「言語」のプロジェクトに参加し、その成果を「日本人の知識階層における話しことばの実態」として報告しました（昭55・3）。

この調査は、話しことばの実態を録音し、それを材料としているような分析をしたもので、特に言語生活に関係の深い部門としては、場面からみた分析（担当日向茂男氏）があります。対話などは現実にはどう構成されているか、といったようなことがデータに基づいて示されています。

国立国語研究所以外の注目すべき動きをいくつかあげてみましょう。

まず第一には柴田武氏を中心とする仕事です。柴田氏は東大時代

に、学生とともにいろいろな地域で言語の社会調査を試みておられますが、このうちの、昭和52、53年の札幌における敬語調査についての報告が、54年ごろから盛んに発表されています。以上はわたしの担当外ですが、つづいてわたしの紹介の責任の範囲でも、文部省科学研究費特定研究「言語」の報告として『都市の敬語の社会言語学的研究1、2』として出ています。

一連の敬語調査の整理分析には荻野綱男氏の数量化方式が開発され、それにより多くの成果で、今までのいわば近似的な数値によるのではなく、一層客観的な数値によって示されるようになりました。この数量化は、これもわたしの分担の範囲ではありませんか、昭和57年の金田一賞を得ています。

この荻野氏や井上史雄氏らのグループは、東京都文京区内のことばの実態について、根津および西片で調査をしました。主なねらいは「新方言」と「言葉の乱れ」についてですが、この成果の発表は、これもわたしのカバーする範囲を出た昭和57年になってからです。これは次回の担当者が取り上げるべきものでしょう。

次に注目すべきグループとしては、国際基督教大学のフレッド・C・C・パン氏を中心とするものがあります。

このグループの人々は、この面については「社会言語学シリーズ」という叢書によって成果を発表しており、この期にはそのNo3として、堀素子、F・C・パン両氏編『ことばの社会性』（文化評論出版）が出ています（昭56・8）。

この本は目次によりますと、I 発話行動と言語の変度、II 言語行動の社会的組織、III 応用言語社会学における諸問題、となつてい

て、計八つの論文が載っています。うち五つは日本語と外国または外国語との関わりに関係のあるものとなっています。これらもまた社会言語学の一つの大きな分野です。ただしⅢは序文（英文）の Applied Sociolinguistics の翻訳らしいのに、どうして「応用言語社会学」とされているのか、学問への認識の問題であるだけにゆるがせにはできない食い違いだと思います。

ついでに言いますと、昭和55年11月末現在の日本言語学会会員で、自らの専門を「社会言語学」とする者15人、「言語社会学」とする者4人と圧倒的に「社会言語学」派が多いのに、少数派の方にはパン氏を初め、鈴木孝夫氏、柴田武氏など錚々たる方々が名を連ねているのは訳がわかりません。

さて、このパン氏を中心としたグループはまた、手話や幼児言語という問題にも熱心であつて、やはり同じ文化評論出版からそれぞれ「手話言語シリーズ」「幼児言語学シリーズ」として出ていて、今期では、前者にやはりNo3の『手話と文化——類人猿の言語と人間言語の起源——』、後者に『言語習得の諸相』があります。これらはもちろん言語生活に大いに関係するところですが、主となる分野のところ取り上げると思いますので、ここでは詳しくは紹介しないことにします。手話については昭和56年が国際障害者年であつたということもあつて、これについての著作、論文が多く見られたことをつけ加えておきます。

なお、パン氏編集になる Language Sciences は年間二回の発行ペースをつづけていますが、編者の興味を反映してか、同種のものよりも社会言語学への比重が高いように思われるのは大変結構なことです。

以上の三つのグループがグループとして最大であるようで、今回のこのわたしの記述もそこに重点が置かれました。最初の二つのグループは、それぞれ共同して調査をしています。言語生活の実態ということになりまずと、どうしても調査をしなければなりませんし、調査の結果を信頼性高く出すためには、わたしが上に紹介した『大都市の言語生活』中の「調査の目的と意義」で述べたように、多くの人について調査しなければなりません。そのための一つの方法は複数の調査員による共同調査です。このためにもグループを作ることになります。

しかし第三のパン氏のグループはこのように一団となって調査をするというのではなく、属する個々人がそれぞれの問題について考え、あるいは調査した結果を報告するという形をとっています。パン氏の資質もこのような調査チームのオルガナイザーよりも、精力的な論文執筆グループを作り上げるところにあるように思われます。調査はすべてが共同調査でなければならぬものでもありませんから、これも立派な一つの道であろうと考えます。

広く言われていることですが、一国家一民族一言語である日本では、日本語と外国語との接触についての問題はあまり取り上げられてきませんでした。アメリカでは、英語と他言語との二言語使用の問題が社会言語学進展の一つの引き鉄になっていたのでしょうか、日本では、二言語使用というものに近いところで、標準語と方言との接触の問題から社会言語学が発出したのでした。

しかし、世界の国際化とともに、だんだん外国語との接触が多く

なってくると同様に、一言語内での方言の問題以外に、この方に関しての研究も行われるようになりました。その一端は先の「ことばの社会性」にも見られました。多くの言語についての研究が組織された、文部省科学研究費特定研究「言語」にも、二言語使用について調査研究するグループができて、その最終報告として代表者比嘉正範氏によって『日本におけるバイリンガリズム』が昭和55年3月に出版しました。

この内容は主として、日本の経済発展とともに多くなった、在外子女および帰国子女、特に後者についての調査報告です。この面は言語の問題が最も大きなものでして、この期間に飛躍的に研究が進展しました。とりわけ昭和56年1月に異文化間教育学会が設立されて活動を開始したことをつけ加えておくことにします。

異文化間コミュニケーションの問題では、直塚玲子氏『欧米人が沈黙するとき』（大修館書店、昭55・11）があります。書名は「欧米人が沈黙するとき」ですが、その裏返しとして当然「日本人が沈黙するとき」も取り上げています。つまり、一方はそのとき何も言わない、ました直接触れない、ということがあって、そこに異文化間コミュニケーションでは大きく問題になるのだ、という指摘です。

これはいわば、一方がノンバーバルになるわけですが、さらにこの期の言語生活研究で他に特筆すべきことはノンバーバルな面の研究です。

この面の一般的な概説書としては、W・フォン・ラフラーエンゲル氏編著、本名信行・井出祥子・谷林真理子三氏編訳の『ことばに

よらない(伝達—ノンバーバル・コミュニケーション—)(大修館書店、昭56・5)とウオレン・ラム、エリザベス・ウオトソン二氏著、小津次郎氏他訳『ボディ・コード—からだの表情—』(紀伊国屋書店、昭56・9)とです。前者は、ICUパン氏のグループに属する人たちの翻訳です。なお、デズモンド・モリス氏著、藤田統氏訳『マンウオッチング—人間の行動学—』(小学館、昭55・2)があり、雑誌連載ものとして、大修館書店の『英語教育』に出た金山宣夫氏「文化接触と非言語的言語」があります。

例によってアメリカで始まると英語学畑の人が日本で騒ぎ出すというパターンで、日本でも、研究の眼がそこに集まったようです。しかしこれはアメリカからの刺戟というよりは、実は言語生活研究に思いを潜めれば、当然出てくるはずの分野でして、日本でも独立にこの面の研究はわたしの担当の期には本格的に船出してしました。

アメリカの概説書のあげている例はどちらかというところケーススタディ的のものであるのに対して、社会言語学的な伝統の長い日本では、パイロット的なものながら、科学的方法論摸索のための調査が始められました。出発点は全くノンバーバルというよりは、まず言語に随伴する行動に求めています。この行動をどのように客観的に記述するかはなかなかむずかしいところがあるようですが、国立国語研究所の江川清氏を初めとするグループは既にいろいろな方法を開発中で、その方法によるデータの蓄積もある程度あるので、今期には報告は公式には出ていませんが、近い将来には何らかの成果が出るものと思われまます。

この面でも国際化時代の反映として、江川氏らは国立国語研究所

の日本語教育センターの研究員とチームを作り、あるいはドイツ、フランスの研究者と協力して、あいさつを中心として、このような面での比較対照研究を始めています。ドイツとの対照研究の一部は、文化庁編「ことば」シリーズ14『あいさつと言葉』に杉戸清樹氏が発表しています(大蔵省印刷局、昭56・3)。これも、さらに詳細な結果がこゝ一、二年の内に期待されるようです。

また、このチームの一人田中望氏は、テレビドラマを材料として、しぐさの国際比較をアメリカ人と日本人とについて始めていて、これも萌芽的な研究として注目されます。

話しことばの研究が盛んになったのもこの期の一つの傾向であったようです。先に述べた「日本人の知識階層における話しことばの実態」もそうでしたが、この実態調査の一つの結論では、今まで、話しことばの資料として小説の会話部分や、戯曲、映画シナリオなどが使われていましたが、これは話しことばの代用にはならないようです。どうしても生の会話そのものを材料としなければならぬことが明白になりました。

NHKことば調査グループ編『日本人と話しことば』(日本放送出版協会、昭55・11)はこの分野の調査ものとして注意されたいと思います。

なおこの点で、昭和56年10月に中公新書から出た入谷敏男氏『話しことば—その仕組と展開—』はディスコースのアナルシスの一つの面を開いたものとして注目されました。

さらにこの分野では、わたしの扱う期間の前ですが、現神戸大学の永岡慶三氏による「対話の発言者遷移に関する分析」あるいは

「発言者の対話性分析」が人間工学的な手法による工学者からの分析として今後の発展が注目されます。言語生活の面ではどうしても今後は行動計量学的な考え方が必要になってくると思われれます。

昭和56年10月に出た、陳原氏著、松岡栄志氏外訳『ことばと社会生活』（凱風社）は「社会言語学ノート」と注してあるので、最後に取り上げます。言語生活という点ではここで紹介すべきものだと思いますが、わたしの考えている狭義の社会言語学には入りにくいものと思います。

ただ、たとえば毛沢東崇拜についてその価値のなさを論じたりしているのを見ますと、中国もここまで来たのか、という思いにかられ、このような本が中国で発行されたことに喜びを覚えます。この道が再び引き返す道でないことを強く望みます。

以上、つとめて重点的に概観を試みました。このような観点からしましたので、雑誌論文にまで言及する紙幅の余裕はほとんどなくなってしまうました。ご了承をお願いいたします。

—— 国立国語研究所長 ——